

民族のアイデンティティ

八月初めから二十三日まで、東日本大地震被災地でボランティア活動に参加した。内モンゴル自治区出身のモンゴル人留学生五人が一緒に、被害が甚大だった石巻市や女川町近くの建設会社の飯場に泊めてもらい、被災住宅の後片付け、清掃、瓦礫の分類と集積などをした。東京居住の学生が二人、関西居住が三人、私が直接知っている学生は二人、モンゴル人学生はほとんどが初対面同士だったが、昼は労働し、夜は勉学に励み、全員が貴重な体験を得たとの思いで帰れたのは幸いであった。

他の少数民族留学生と同様、モンゴル人留学生も日本に来て、初めて自分がモンゴル人であることに気付くという。日本人には不思議なことだが、小学校でモンゴル語教育が選択制となり、学校で中国人の歴史を学び、モンゴル民族や文化に関する書物は少なく、社会全体が次第にモンゴル人であることの意識を失いつつある中で、民族性の強調は逆に「祖国分裂」の陰謀ととられかねない雰囲気なのだろう。しかし日本に来て、本屋や図書館でモンゴル関連の書籍を自由に買い求めまた読み、今度はモンゴル人としてのアイデンティティの確立に悩み始めるという。

今回の合宿が良かったことの一つは、年齢も出身地も大学も専攻も違う学生たちが、それぞれの経験を話し合い、モンゴル人としてのアイデンティティにつき、真剣な意見交換ができたことであった。四十三歳の大学院博士課程在籍の学生が、每晚遅くまで、その日のボランティア活動をパソコンで発信する二十六歳の学部学生に、モンゴル文語の誤りを正してやっている光景は、感激的であった。彼らはこの経験をともに、一月一回、東京と大阪で、モンゴル人留学生の合宿を計画している。

モンゴル人と一緒に暮らしてみても、私が新たに気付いたこともいろいろあって、酒の飲み方もその一つだった。私は、モンゴル人は全員が大酒飲みだと思っていた。事実、酒に強い学生もいて、深酒をしては最後は殴り合いとなり、しかし翌朝にはさっぱり仲直りをすると聞いていた。遊牧民に相応しい男らしい民族性と思っていた。しかしそんな軽々しいことではなかったようだ。学部で物理学を修め、神戸大学で研究生として鋼材の強度研究に従事しているモンゴル人学生は、太い黒縁眼鏡を掛けいかにも学者然とした若者だが、彼でさえ「酒を飲むと日ごろの怒りが腹の底からこみ上げてきて、漢族の寮に押し掛けては殴り合いをしました」と言っていた。

人口四〇〇万人の内モンゴル自治区からの留学生は一人人で、ウイグルやチベットより遙かに多い。これは明治時代以来の日本とモンゴルの関係の深さによるものだが、留学生には勇気と誇りをもち民族再興のために奮闘してもらいたいし、日本人には彼らの心情を理解してやってもらいたい、そんな気持ちを含めた夏の東北行であった。(平成二十三年十月二十日)